

## 第6回多摩市自治推進委員会 要点記録

平成26年2月13日（木）18：30～20：30

多摩市役所3階 特別会議室

出席者：安藤委員長、松本副委員長、川添委員、小嶋委員、田中委員、横山委員

事務局：企画政策部長、企画課長、企画課主査、企画課主事

審議：今後の取り組みについて

### □開会

委員長 前回は、地域が抱える様々な課題を解決するためには、「人とのつながり」や「交流を生み出すこと」が重要であるということで意見が一致した。

今回は、今後、自治推進委員会でどのようなテーマを中心に議論し、提言するかについて、具体的な事例を基にしながら話し合いたい。

まず、本日の配布資料「これまで（第1回～第5回）の主な論点について」について、事務局から説明をお願いしたい。

資料1に基づき、事務局から説明を行った。

副委員長 市民同士が話し合っただけでルールを作ることで、解決できる仕組みがあると良い。例えば、先日（2月8日）の大雪で、雪かきの要望が市役所へ多く寄せられたと聞いた。身近に雪かきを頼める相手がいれば、そのようなことも無くなるのではないか。

委員長 同感である。同様に、銀杏並木の事例もある。ある自治体で、子どもが地面に落ちた銀杏の実・葉に含まれる油で滑って、転んでしまった。そのことについて、親が市役所へ苦情を言ったところ、市役所は、銀杏並木の枝を全部切ってしまった。もし市民同士で話し合うことができれば、より良い解決方法が考えられたのではないか。

ここで重要なことは、いかに市民側の責任を作るかである。そのためには、いかに制度上の壁を崩して、市民ニーズに合ったものに作り替えていくのかを考える必要がある。その過程では、行政だけで仕組みを作るのではなく、市民の力も必要である。例えば、コミセンは、今後、地域住民で構成される運営協議会ではなく、NPO等が担うことも考えられる。

委員 確かに、制度上の壁を取り払い、解決に導くことは重要である。例えば、廃止となったコミセンのお風呂にしても、対象年齢を60歳以上と限定しない方が、より多くの市民が利用できたのではないか。

委員長 そうした制約をどれだけ取り払うことができるのか。現在では、多世代を呼び込むための仕組み作りが求められている。

副委員長 私も、制度と現状のギャップがあると感じている。例えば、コミセンは、世代間交流の推進を目指しているが、今では子どもを集めるのが難しい状況がある。また、公共施設の「老人福祉館」という名称は時代遅れであると感じる。更には、コミセンのお風呂の跡スペースについて、例えば、水耕栽培の場所として活用する方法も考えられる。こうした制度と現状のギャップを埋めるのが「自治」ではないか。この委員会で、「自治」とは何かということ、別の言葉で言い換えられるようになると良い。

委員 私の母は、コミセンのお風呂をよく使っていた。同世代のコミュニケーションの場として、外出するきっかけになっていた。そのことを考えると、多世代交流の場はもちろん必要であるが、同世代交流の場も必要であると思う。

副委員長 確かに、同世代、多世代交流のどちらにするか、選べることは大事である。

委員長 人との繋がりを生み出すことは大切である。例えば、食べることは、空腹を満たすことや栄養を取ることだけが目的ではない。飲み屋、カフェにどうして人が集まるのか。一人で食べるよりも、みんなと食べる方が美味しいからである。

委員 昔はニュータウン地域でも「どんど焼き」をやっていたが、煙の苦情が来ることから、できなくなってしまった。また、公園でのサッカーも、近隣住民から苦情があることで、できなくなってしまった。そのことを考えると、地域における繋ぎ役とは、どのような役割を担うのだろうかと思う。

一方、私が活動している「多摩グリーンボランティア森木会」では、ボランティアに積極的に関わりたいという方が多い。本活動は13年目を迎えており、大きなネットワークが出来上がっている。

委員長 そうした組織と、自治会・町会・管理組合等の地縁型組織をどのように繋げ

るのか、ということも課題の一つである。

委員 一方で、地域の中で繋がりが無く、意見を表明できない「声なき声」もある。組織の意見が全てではない点が難しいと感じる。

委員長 また、最近、各地で「プレーパーク」ができていますが、プレーパークのミッションは、子どもの自由な遊びを大切にすることである。そのためには、一定のルールの下で、子どもが火を扱うことも許されるなど、危険なものを予め取り除いたりしたりしない。ここで重要なことは、危険だから駄目だということではなく、リスクを承知しながら、いかに使う側の想いと周りの人の想いを融合させるかである。その際に、コーディネーターのような繋ぎ役が必要となるのではないかと。

委員 多摩市教育委員会では「2050年の大人づくり」をキーワードとして、ESDを推進している。昨年11月に多摩市で開催されたESD全国大会では、ベネッセ、JUKIなど民間企業の協力が得られている。そうした行政だけではなく、関心を持った市民や企業と繋がる必要があると思う。そのために、例えば、駅前ですべて「自治」イベントを開催することも考えられるのではないかと。また、市内の緑の管理に関しては、10数年前から「量」から「質」へと方向転換している。緑の質を高めるには、市民の緑への関わりを増やしていくことが必要であるが、「グリーンボランティア森木会」として、どのような活動ができるのか悩んでいる。

委員長 理想は、活動しながら育ち合っていくことである。「自治」のベースは「人」である。「自治」とは、「人と関わり合って、気づき合って、共に育ち合うこと」ではないかと。そのためには、関わり合うためのマナーを学ぶことも必要である。また、「自治」とは、違うものを包み込み、お互いに刺激し合えるものであると思う。単にリーダーシップを発揮することではない。

委員 確かに、自治会・町会・管理組合の会長のように、順番が来たからリーダーを務めるというものではない。

副委員長 「自治」とは、知識として教えることができないものだと思う。どこかで誰かのために何かできる経験があると、人は変わる。しかし、「誰かのために」という部分が非常に難しい。

また、「自治」とは、人と人との関係を指している言葉である。行政と一緒に

何かに取り組むことだけが「自治」を指すのではない。

委員長        それでは、本日の議論はここまでとしたい。  
                  次回以降、これまでの議論を整理して、テーマを焦点化していくとともに、  
                  今後のスケジュールを決めていきたい。そのために、委員長、副委員長及び事  
                  務局で事前に打合せの場を設けるものとする。  
                  次回の開催日は、3月19日水曜日とする。これで第6回委員会を閉会する。

□閉会